

その他

## オンラインシステムを活用した混合型在宅看護学実習の実践 Hybrid Home Care Nursing Practice Utilizing Online System

末田千恵<sup>1)</sup>\*, 富塚美和<sup>2)</sup>, 北岡英子<sup>3)</sup>

1) 神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

2) 駒沢女子大学看護学部看護学科

3) 湘南鎌倉医療大学看護学部看護学科

Chie Sueda<sup>1)</sup>, Miwa Tomizuka<sup>2)</sup>, Hideko Kitaoka<sup>3)</sup>

1) Kanagawa University of Human Services, Faculty of Health & Social Services, School of Nursing

2) Komazawa Women's University Faculty of Nursing Department of Nursing

3) Shonan Kamakura University of Medical Sciences, Faculty of Nursing, Department of Nursing

### 抄 録

【目的】2020年度、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による緊急事態宣言発令の影響で実習中止を余儀なくされた学生に対し、オンライン・学内実習と施設実習を併せて実施した「混合型在宅看護学実習」について、作成したプログラムが従来の実習目標を達成できる内容であったのかを本プログラムを履修した学生の自己評価と教員評価から総括的に検討する。

【方法】作成した「混合型在宅看護学実習」プログラムを履修した学生14名の自己評価表・学びの記述、教員の評価表を用い、総括的に評価した。

【結果】14名の自己評価では全員が、4つの実習目標について、概ね達成できたと評価しており、教員による評価でも目標を達成できなかった学生はいないと判定した。これらのことから、「混合型在宅看護学実習」プログラムは実習目標達成に有効であったことが確認できた。

【考察】オンライン・学内演習では、施設実習で活用可能な教材の提示や課題設定等の工夫をしたこと、課題ごとにカンファレンスを行い、学生間で学びを共有したことなどが目標の達成につながったと考える。加えて施設実習でのリアリティのある経験が、学生の学びをさらに深めることにつながったと推察された。

キーワード：在宅看護学実習、混合型実習、総括的評価

Key Words：Home Care Nursing Practice, Hybrid Practice, Summative Evaluation

### I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、「COVID-19」とする）の拡大により、日本においては2020年4月

7日に初めての緊急事態宣言が発出された。その影響により、看護基礎教育において看護実践能力を修得する上で重要な臨地実習は、病院・施設の受け入れが中止となり実習ができないという事態に至った。これに対して文部科学省と厚生労働省は、2020年2月28日および同年6月1日付で、「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」の事務連絡を発表した。このなかで「実習施設の変更を検

著者連絡先：\*末田千恵

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

E-mail：sueda-ur8@kuhs.ac.jp

(受付 2021.9.8 / 受理 2022.1.5)

討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいでの実習を行って差し支えないこと、なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない<sup>1)</sup>と明記された。そのため、多くの看護師養成校では、内容や方法など様々な工夫をこらしながらオンラインシステムを活用した実習（以下、「オンライン実習」とする）や学内演習等の実習代替プログラムを作成し、その取り組みが報告<sup>2, 3)</sup>されている。

本学の在宅看護学実習は、毎年1月中旬頃から2月下旬にかけて、訪問看護ステーションで2週間の実習を行っている。2020年度の実習も施設の協力を得て、施設実習が実施できるよう準備をしていた。しかし神奈川県では、実習直前の2021年1月7日に緊急事態宣言が発令されたため、急遽、実習の受け入れが中止となる施設が発生した。そのため、実習が中止となった施設に配置されていた学生に対しては、「視聴覚教材を活用したオンライン実習（5日間）および学内演習（2日間）、施設実習（2日間）」で構成したプログラム（以下、「混合型在宅看護学実習」とする）にて、実習を実施した。

現在、COVID-19ワクチン接種率は高くなっているものの、新たな変異株の発生など感染終息の見通しは立っていない。そこで今回実施した混合型在宅看護学実習プログラムの内容を総括的に評価し、今後、何らかの理由で通常実習が困難となる事態が生じたときの備えとして、また、より効果的な臨地実習のあり方を検討する一助になると考えた。

## II. 目的

2020年度、COVID-19による緊急事態宣言発令の影響で実習中止を余儀なくされた学生に対し、オンライン・学内実習と施設実習を併せて実施した「混合型在宅看護学実習」について、作成したプログラムが通常の実習目標を達成できる内容であったのかを本プログラムを履修した学生の自己評価と教員評価から総括的に検討することを目的とする。

## III. 従来の在宅看護学実習プログラム

本学の在宅看護学実習は、3年次後期（2単位90時間）に配置されており、約90名の学生を3クール（1クール約30名程度）に分け、訪問看護ステーションで2週間（施設実習8日間、学内実習1日間）の実習を行っている。

実習目標は、以下の4項目で構成されている。

- 1) 看護職が運営する事業所としての訪問看護ステーションの機能について学ぶ。
- 2) 在宅療養者と家族の生活を理解し個別性に応じた看護について考察できる。
- 3) 在宅療養者とその家族に対する看護過程の展開を理解する。
- 4) 在宅療養者とその家族のQOLの維持・向上のために必要な社会資源の活用と連携方法について理解する。

事前学習としては、実習施設の所在する地域の特徴や社会資源に関する学習、訪問看護のしくみや関係法規に関する復習、在宅療養者に多く見られる疾患と看護に関する学習を課題として提示し、提出する。

施設実習において学生は、あらゆる発達段階にあり様々な疾患を抱えながら生活している療養者宅に訪問看護師と訪問し、見学を中心とした同行訪問2～3件/日を行う。

看護過程の展開として、実習期間中に少なくとも2回以上の同行訪問が可能な療養者1名を受け持ち、情報収集・アセスメント・看護計画の一連の流れを、実習指導者・教員の助言を受けて立案する。看護計画の実施については、施設の意向に沿って、学生は「見学のみ」「バイタルサインの測定や訪問看護師が行うケアの介助等、一部実施」「計画に従って実施」といういずれかの方法で実施する。その他、退院前カンファレンスやサービス担当者会議など、多職種連携の会議に参加できる場合には参加するという実習内容である。

さらに各クールの実習最終日は、学内で各訪問看護ステーションの特徴や地域特性、個別性のある看護等について最終カンファレンスを行い、学びを共有する。

#### Ⅳ. 混合型在宅看護学実習プログラムの内容と実施方法

##### 1. 「混合型在宅看護学実習」プログラムの内容の検討

実習は9日間を予定していたが、施設側の意向により実習受け入れが一学生2日間と限定されたため、残りの期間は「視聴覚教材を活用したオンライン実習」（5日間）、学内演習（2日間）のプログラムを設定した。

通常実習の4つの目標と事前学習の内容は変更せず、通常実習で経験する内容を考慮しながら目標を達成できるようプログラム内容を以下の通り検討した。

1) 目標1は、訪問看護ステーションの機能や所在する地域特性について学ぶ内容であるため、訪問看護師の1日の業務の流れや訪問看護の仕組み、地域性を考慮した訪問看護の視聴覚教材を活用した。視聴後には、訪問看護師の役割など内容に沿った課題を提示した。

2) 目標2は、訪問看護の対象者は、すべての発達段階にある様々な疾患や障害を抱えながら生活している人であり、同行訪問で学ぶことが多い。しかし2日間の施設実習では同行訪問からの学びにも限界がある。そのためYouTubeで公開されている動画の中から、小児・高齢者・精神障害者・終末期療養者への様々な訪問看護の動画から適切と思われる教材を選択し、訪問看護疑似体験とした。

3) 目標3は、通常実習では実際に受け持つ在宅療養者を対象に看護過程を展開するが、本実習では日程的に療養者を受け持つことができなかったため動画と資料によって事例を提示した。事例は、訪問看護の利用者で最も多く、過去の在宅看護実習でも学生が最も多く受け持った脳血管疾患の高齢者とした。しかし、通常実習で行っているコミュニケーションによる情報収集や直接身体に触れる看護ケアは、動画のみでは限界があると判断した。それを補完するために教員が療養者と家族役となり、オンラインで学生が直接情報集する時間とロールプレイによる看護ケアの実施を設定した。

4) 目標4は、多職種連携に関する内容であるため、地方の1病院を拠点に実践されている地域連携

に関するYouTube動画と、担当者会議等の視聴覚教材を用い、視聴後に課題を提示した。

最終的に、実習目標と混合型在宅看護学実習の内容を対応させたマトリックス表で内容の過不足を検討し、「視聴覚教材を活用したオンライン実習（5日間）および学内演習（2日間）、施設実習（2日間）」で構成される「混合型在宅看護学実習」プログラムを作成した（表1）。

##### 2. 「混合型在宅看護学実習」の実施

###### 1) 課題学習（視聴覚教材を活用したオンライン実習）

実習1日目は、訪問看護の仕組み、訪問看護師の1日の業務など訪問看護の基本を理解する内容とした。そしてカンファレンスでは、事前学習と結びつけながら訪問看護の制度について復習し、同行訪問時の学生の態度を含めた訪問看護師に求められる基本的態度やスキルについての学びを共有した。

実習2日目には、様々な訪問看護、地域連携に関する8つの動画を教材として選択した。学生にはそれらのURLを提示し、すべて視聴した後に、訪問看護の実施における共通点・相違点、訪問看護師の看護観、多職種チームにおける訪問看護師の役割など指定した課題をまとめ、カンファレンスで発表し学びの共有を行った。

実習3日目は、サービス担当者会議を含めた在宅療養を支えるケアチームに関する既存の視聴覚教材を視聴した後、課題として在宅療養に関わる様々な医療・介護の専門職の種類とそれらの専門性および役割についてまとめ、カンファレンスで発表し学びの共有を行った。

###### 2) オンライン・学内演習

###### (1) 受け持ち療養者への看護過程の展開

看護過程の展開にあたっては、学生の自己学習時間をより多く確保し効果的なものとするために、実習1日目に展開方法やロールプレイの進め方とともに受け持ち療養者（事例）を提示した。

受け持ち療養者は、学生がリアリティを感じるようYouTubeで公開されている動画に登場する「7年間、娘の介護を受けながら在宅療養している脳出血後遺症のある80代女性」を設定した。看護過程を展開するにあたっては、学生が動画から得られる情

表1 実習目標と混合型在宅看護学実習内容のマトリックス

項目	学習および実習内容	目標1	目標2	目標3	目標4
事前学習	実習施設の所在地の特徴や社会資源	○			○
	訪問看護の仕組みや関係法規	○			○
	在宅療養者に多い疾患・治療及び看護		○	○	
課題学習 (動画視聴・ オンライン実習)	訪問看護の実際、訪問の準備から終了後の調整	○	○	○	○
	訪問看護師の1日の業務の流れ	○	○		○
	様々な発達段階・疾患のある在宅療養者への訪問看護		○	○	○
	特徴的な地域の訪問看護（温暖・寒冷地など）	○	○		
	多職種連携	○	○	○	○
看護過程の展開 (オンライン・ 学内演習)	受け持ち療養者の訪問看護（動画の事例）		○	○	○
	受け持ち療養者の情報収集		○	○	
	療養者・家族とのコミュニケーションによる情報収集		○	○	
	アセスメント			○	
	全体像の作成			○	
	療養上の課題の抽出			○	
	看護計画の立案・評価			○	
	中間カンファレンス：全体像と看護計画の発表			○	
	ロールプレイでの看護計画・シナリオ作成			○	
	ロールプレイでの看護計画・シナリオ発表			○	
	ロールプレイによる看護計画の実施			○	
	ロールプレイの評価と振り返り			○	
カンファレンス	毎日：実習の振り返りと学びの共有（1 時間/日）	○	○	○	○
	最終：実習全体の学びの共有	○	○	○	○
レポート	地域における看護師の役割について	○	○	○	○
施設実習	施設オリエンテーション	○			○
	同行訪問	○	○		○
カンファレンス	毎日：実習の振り返りと学びの共有（30 分/日）	○	○	○	○

報に加え既往歴・生活歴・ADLなどの基本情報、訪問看護指示書、訪問看護師が訪問で行っているケア等、看護過程の展開に必要な情報を追加して、文書で提示した。学生にはこれらの情報を基にアセスメントをしていく中で、不足している情報を明確にするよう助言した。

実習2日目に学生全員がコミュニケーションや観察によって、療養者と家族介護者から直接必要な情報を収集する機会として同行訪問看護演習を実施した。この演習ではオンラインで、学生が訪問看護師と同行訪問をする想定で、教員2名が療養者と家族介護者役となり、5分程度の時間を設け、学生の質問に答えるとともに、学生の求めがあれば家の間取り、趣味等の写真を追加情報として提示した。最終的に学生が得た情報には差があったため、カンファレンスで各自が得た情報を学生間で共有する時間をとり、再度不足している情報を追加で質問する機会を設けるなど、すべての学生が共通の情報を持てるよう配慮した。得られた情報を基に学生は看護計画

を立案し、実習4日目の中間カンファレンスにて、全体像、療養上の課題の抽出、援助計画を発表し、学生間での話し合いや教員の助言をもとに内容の充実を図った。

## (2)ロールプレイ

看護過程を展開した受け持ち療養者への看護計画のなかから、訪問看護時に実施するケアとして、排便コントロール、入浴介助の2場面を設定した。実習4日目の午後、学生はグループ毎にいずれかの1場面について、訪問看護師として1時間の訪問看護を実施する想定で、ケアスケジュール、具体的援助方法について詳細なシナリオと看護計画を作成した。

これらを実習5日目にオンラインで発表し、教員の助言や学生間の話し合いで再度、方法や内容の検討を行った。さらに使用物品については、自宅にあるものを工夫して使用すること、経済的な負担を考えることを基本とし、実習の終了時間までにおむつ

やタオル等の使用物品リストを提出し、教員はロールプレイで使用できるよう手配した。

実習6日目に自宅を想定した実習室で、学生が輪番で訪問看護師役・療養者役・介護者役となって、1時間の訪問看護のロールプレイを実施した。なお、ロールプレイは、振り返りの参考とするため学生の許可を得て撮影した。終了後、療養者・家族の立場で感じた率直な感想や意見の共有、看護師の立場で安全・安楽なケアを実施するための振り返りのカンファレンスを実施し、ケアの評価を行った。

### 3) 施設実習

施設実習は、本学の実習施設のなかでコロナ禍であっても従来の実習と同程度の経験が可能と判断した施設の協力を得て、本学学生が実習をしていない期間に2日間の施設実習を設定した。

実習では、管理者からの施設オリエンテーション、同行訪問2～3件/日（2日間実習で延べ件数4～5件程度）、学びを共有するためのカンファレンスを実施した。

### 3. 「混合型在宅看護学実習」の運営

実習は通常実習と同様に2名1グループで編成し、実習時間は9時～17時までとした。オンライン・学内演習は、各クール2～3グループ（学生4～6名）で、2名の教員で担当した。オンライン実習では毎朝、時間までにオンラインシステムにアクセスした学生を出席とし、カンファレンス参加をもって終了とした。課題、日々記録は翌日の9時30分までにオンラインシステムの所定の場所に提出することとした。1日の実習計画は、学生の進捗状況や意見を参考に、適宜修正した。学内演習は、自宅を想定した環境で実施できるよう地域ケア実習室で実施した。

## V. 研究方法

### 1. 研究対象者

COVID-19による緊急事態宣言の発令により配置されていた施設での実習が中止となった学生で、「混合型在宅看護学実習」に変更となった本学3年生14名を対象とした。

## 2. 調査方法および内容

プログラム内容を総括的に評価するため、最終的に学生から提出された実習記録のうち学生の自己評価表および学びの記述と、実習目標達成度の客観的評価として教員による評価を用い、プログラムを総括的に評価した。

### 1) 実習の自己評価表

自己評価表は、4つの実習目標の下位目標（18項目）からなり、4段階（A：十分に達成できた B：達成できた C：少し達成できた D：ほとんど達成できなかった）で評価した。

混合型在宅看護学実習プログラムにおける学生の目標達成度を確認するために、オンライン実習（5日間）および学内演習（2日間）が終了した時の自己評価（「以下、中間評価とする」）、全実習プログラムが（9日間）が終了した時（「以下、最終評価とする」）の2時点において、学生に自己評価してもらった。

### 2) 学びの記述

学生の自己評価を解釈するための定性的データとして目標ごとに記述された学生の学びをまとめた。

### 3) 教員による評価

学生と同一の評価項目で、事前学習、課題学習、レポートなど記録物の内容、カンファレンス等での学生の発言・態度などから各学生の実習目標達成状況を教員2名で総合的に評価した。

## 3. 倫理的配慮

本研究の対象となった学生に対しては、成績確定後に研究への協力を依頼し、個人情報の保護、研究の目的外の使用をしないこと、自由意思による参加、同意後の撤回等を文書で説明し、同意書へのサインを得た。また本研究は、神奈川県立保健福祉大学の研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：保大第5-21-7）。

## Ⅵ. 結果

### 1. 学生の実習目標に対する自己評価

4つの実習目標に対して、14名すべての学生が、「A：十分に達成できた～C：少し達成できた」の

いずれかの回答をしており、達成できなかったという学生はいなかった。学生の間と最終の自己評価の結果は表2のとおりである。中間評価と最終評価で、下位目標（18項目）のうち1項目でも良い方に变化した学生数は、実習目標1が8名、実習目標2

表2 実習目標に対する学生の自己評価

n=14（数字は人数）

実習目標	下位目標	オンライン・学内 演習終了時(中間評価)				全実習終了後 (最終評価)			
		A	B	C	D	A	B	C	D
目標1 看護職が運営する事業所としての訪問看護ステーションの機能について学ぶ	訪問看護ステーションの運営主体、人員構成、サービス内容、利用者概要、訪問担当地域、必要書類、緊急体制について知る	6	6	2	0	10	4	0	0
	訪問看護の制度やしき、関係法規について説明できる	4	8	2	0	4	9	1	0
	事前学習や施設オリエンテーションを踏まえ、訪問看護ステーション所在地の地域の特徴や在宅療養を支える社会資源について理解する	1	11	2	0	6	7	1	0
	訪問看護師の役割について理解する	9	5	0	0	12	2	0	0
目標2 在宅療養者と家族の生活を理解し個別性に応じた看護について考察できる	在宅療養者と家族の生活歴、価値観、人生観などを知る	3	8	3	0	9	5	0	0
	在宅療養者と家族の身体的・心理的・社会的側面、発達課題を理解するとともに強みについて理解する	7	6	1	0	9	5	0	0
	在宅療養者と家族との関係や生活環境が療養生活に及ぼす影響を理解する	11	3	0	0	12	2	0	0
	在宅療養者と家族のニーズを踏まえ、訪問看護師に必要な知識や技術、態度を説明できる	8	5	1	0	9	6	1	0
	在宅療養者とその家族が、在宅生活を継続するために必要な看護について述べられる	6	6	2	0	7	6	1	0
目標3 在宅療養者とその家族に対する看護過程の展開を理解する	在宅療養者とその家族に対する看護過程の展開に必要な情報を収集することができる	5	5	4	0	6	6	2	0
	在宅療養者とその家族の身体的・心理的側面、生活環境からニーズをアセスメントし、療養上の課題を抽出することができる	6	8	0	0	6	8	0	0
	優先順位を考慮し、在宅療養者および家族の個別性に応じた看護目標と看護計画を立案することができる	6	8	0	0	6	8	0	0
	在宅療養者への看護計画を可能な限り遂行し、計画について評価することができる	0	10	4	0	0	10	4	0
	受け持ち在宅療養者に対する看護展開の一連のプロセスを理解する	8	6	0	0	8	6	0	0
目標4 在宅療養者とその家族のQOLの維持・向上のために必要な社会資源の活用と連携方法について理解する	在宅療養者とその家族に関する関係職種間の情報共有の方法を知る	11	3	0	0	12	2	0	0
	在宅療養者とその家族に必要なサービスや社会資源の種類や活用方法について理解する	3	11	0	0	6	8	0	0
	在宅における多機関・多職種との連携の重要性について知る	13	1	0	0	13	1	0	0
	他職種との連携・協働における訪問看護師の役割を理解する	9	5	0	0	11	3	0	0

が10名、実習目標3が3名、実習目標4が4名であり、悪い方に変化した学生はいなかった。実習目標ごとの定性的データの概要(学生の具体的記述を「イタリック体」、( ) は人数)を以下に示す。

#### 1) 実習目標1：看護職が運営する事業所としての訪問看護ステーションの機能について学ぶ

中間評価で、「訪問看護ステーションの機能や関係法規、訪問看護師の役割については、事前学習と視聴覚教材で理解を深めることができた(8)」という学生が多い一方で、「聴覚教材だけでは、完全に訪問看護ステーションの機能を理解できていない(1)」と不十分であると評価している学生もいた。しかし最終評価では、「緊急体制について理解が深まった(2)」、「利用者と訪問看護師の会話から地域の特性を知ることの大切さを学んだ(1)」、「住宅街で坂道が多いなど地域の特徴を知ることができた(2)」など施設に行ったことで地域の特徴を実感できたと感じていた。

#### 2) 実習目標2：在宅療養者と家族の生活を理解し個別性に応じた看護について考察できる

中間評価では、「家族関係や生活環境が療養生活に与える影響について、理解することができた(2)」、「療養者は生活者であり、看護師がいない時間も継続して看護を行えるよう計画する必要性を学んだ(2)」、「生きがいのある生活、介護を継続できているという介護力という強みを理解することができた(1)」など療養者と家族の理解に関する学びが記述されていた。しかし、「生活歴や価値観等については具体例がなく曖昧であった(1)」、「生活歴や強みを理解すれば、もっとニーズを掘り下げることができたと思う(1)」というような具体的な生活歴、価値観を感じにくいことも記述されていた。最終評価では、「療養環境を見るだけでもその人の生活観や価値観を知ることができた(1)」、「訪問看護師の生活歴の情報収集につながるコミュニケーションの取り方を見学し、生活歴の情報収集のイメージが持てた(1)」、具体的な生活歴など個別性について記述されていた。

#### 3) 実習目標3：在宅療養者とその家族に対する看護過程の展開を理解する

中間評価では、「優先順位の大切さやつけ方の理解が深まった(5)」、「看護計画について助言をうけ

て修正できた(3)」、ロールプレイでは、「個別性を捉えた看護ケアを考えることができた(1)」、「利用者が必要とするケアが実施できた(1)」などの看護過程のそれぞれの段階での学びについて記述されていた。

反対に、「個別性を十分に考慮した計画立案ができなかった(1)」、「経済状況や介護負担を考慮する必要があると思った(1)」、などの不十分と考えている記述もみられた。特に、「会話の流れからうまく情報を引き出すことができなかった(1)」、「自分のコミュニケーション不足から十分な情報収集ができず、ケアの実施に生かすことができなかった(3)」、「フェイスシートを埋める情報収集に必死で、一問一答のようなコミュニケーションになった(2)」など自身のコミュニケーション技術の未熟さを実感した記述が目立った。

今回の施設実習では、看護過程の展開は実施していないものの最終評価では、学生は、「その人らしい生活や家族との関わりを尊重する重要性の理解が深まったため、より利用者にあった看護が展開できるのではないかと感じた(1)」、「訪問看護師の利用者の尊厳を守る関わり方、自然なコミュニケーションの流れで情報収集する場面を直接見て学べた(1)」など、訪問看護師の療養者や家族とのスムーズなコミュニケーションの見学を通した学びが記述されていた。

#### 4) 実習目標4：在宅療養者とその家族のQOLの維持・向上のために必要な社会資源の活用と連携方法について理解する

中間評価では、「社会資源や多職種連携、その中の看護師の役割は視聴覚教材とカンファレンスから学ぶことができた(9)」、「社会資源を紹介する必要性とそのため知識が欠かせないことがわかった(2)」、など「十分に達成できた」「達成できた」と回答した学生が多かった。

最終評価では、「訪問後すぐにヘルパーに電話する場面を見学した(1)」、「頻繁に他職種と連絡を取りあったり、訪問時に他職種が置いた記録を見る場面を見学できた(1)」など実習施設で具体的な多職種との連携場面を見学したことでの学びが記述されていた。

## 2. 教員による学生の実習目標達成度の評価

「混合型在宅看護学実習」の全過程において、学生の成果物（事前学習、課題学習の提出物、日々記録、レポート等）の内容、学生の発言・態度などの状況を踏まえ、担当した2名の教員で総合的に評価した。その結果、実習目標1～4について、達成度に個人差はあるものの目標を達成できなかった学生はいないと判定した。

## VII. 考察

今回の「混合型在宅看護学実習」において、保険制度や社会資源等の事前学習をもとに視聴覚教材の活用、ロールプレイを含めた受け持ち療養者（事例）への看護過程の一連の流れを主としたオンライン・学内演習後の中間評価で、学生は実習目標に概ね到達したと評価していた。そして全プログラム終了後の最終評価では、すべての実習目標の自己評価が高くなり、学びを深めることができていた。そこで、実施した「混合型在宅看護学実習」が実習目標を達成できた要因について考察する。

本学における従来の在宅看護学実習は、病院看護とは異なり見学を中心に多くの療養者への同行訪問と複数回訪問する療養者を受け持ちとして看護過程を展開するという特徴がある。そのため、様々な対象への訪問看護・多職種連携に関する視聴覚教材とその教材ごとに課題学習を実施し、受け持ち療養者を紙上だけでなく動画と併せたりアリティある事例とした。このような施設実習に即したプログラムの工夫が目標達成を促進した要因の1つではないかと考える。なかでも多職種連携については、中間評価でも学生の自己評価が高く、視聴覚教材の活用が有効であったと考えられ、今後の実習においても事前の視聴覚教材の活用により学びを強化できると推察される。また、厚生労働省の報告書によると、「限られた臨地実習の学修効果を最大にするためには、臨地実習前の準備段階の学修が重要である」<sup>4)</sup>と述べられている。オンライン・学内演習の後の中間評価でも、学生はほとんど実習目標を達成しており、施設実習後の最終評価ではさらにその達成度が高くなった。このことから提供したオンライン・学内演習プログラムは、施設実習を効果的なものにしたと

いう点において、一定の評価ができるのではないかと考える。

2つ目の要因としては、従来の在宅看護学実習では、教員が常時施設にいないため、学生の同行訪問への同席は困難である。さらに訪問予定等も流動的であるため、振り返りをタイムリーに行えない場合もある。しかし本プログラムでは教員が、オンライン・学内演習で学生と関わる時間を多くもつことができ、適切なタイミングで日々、振り返りを実施したことも目標の達成につながったのではないかと考える。

3つ目の要因として、今回、実習目標の達成度を確認するために中間と最終の2時点で評価を行ったことが挙げられる。深山らは、学生は、自己評価表を活用することで自己の目標到達度の把握、課題の明確化などより実習目標の到達に向け行動できる<sup>5)</sup>と報告しており、中間評価をしたことで、学生は自己の実習目標達成度を再確認でき、課題や目標を明確にして、短期間の施設実習に臨むことができたと考える。さらに舟島は、看護学実習は、学生、指導者、クライアントの3者を中心にそれぞれにその他の医療従事者、家族、他の学生が複雑に関係しあうことを必然とする授業である<sup>6)</sup>と述べており、施設実習で学生は、階段や坂道といった地形や環境などの特徴、管理者からのオリエンテーションや訪問看護師と療養者とのコミュニケーションを通して、五感を使ってリアリティのある経験をしていた。また先の報告書において、臨地でしか学ぶことのない必要不可欠な事項として、人間の五感を通してキャッチされる臭いや、その場の空気感といったシミュレーションでは再現困難な感覚、乳幼児の啼泣や離島・過疎地域に住む対象者の生活といったリアリティ<sup>4)</sup>などが挙げられている。さらに、大沼らは、COVID-19禍における在宅看護実習方法として、「同行訪問なし、時間短縮という変則的実習であっても臨地での実習の学びが大きい」<sup>7)</sup>と述べている。本研究の結果からも、2日間という短期間であっても学生にとって施設実習を体験する意義は大きく学習効果は高いと考えられる。

さらに、実習での経験は学生にとって科目の学修だけでなく、進路を考える契機という副次的目的も有する。現在、全国訪問看護事業協会のきらきら訪

問ナース研究会では、新卒で訪問看護事業所に就職する看護師を「きらきら訪問ナース」と命名し、新卒訪問看護師の育成プログラムや人材育成に取り組んでいる<sup>8)</sup>。しかし実際に看護基礎教育を修了した学生のほとんどは、医療機関に就職し、訪問看護ステーションは、臨床経験を経た後の再就職先として認識される傾向にある。実習で在宅看護の意義やそこでの看護職の役割について理解し、訪問看護ステーションへの就職につなげるためにも、短時間でも訪問看護ステーション等での施設実習を経験することは重要であると考え。そこで教員は、日ごろの学生指導やコミュニケーションを通して、訪問看護ステーションの管理者やスタッフとの良好な関係を構築し、看護基礎教育や現任教育について施設側とともに検討していくことが必要である。

#### VIII. 本研究の限界と今後の課題

本論文は、学生の自己評価と学びの記述および教員による評価を用いてプログラムを総括的に評価した結果である。今後は、自記式アンケート等による学生の満足度・率直な意見や通常実習を行った学生との自己評価の比較から実習プログラムを評価することが必要である。そして従来の実習ができなかったことで学生がマイナス感情を持つことがないようなフォローも必要と考える。また、従来の在宅看護学実習と並行して各クール4～6名の学生が「混合型在宅看護学実習」を実施したが、1クール当たりの学生数が少なかったことから実施が可能であったと考える。今後、何らかの理由で通常実習が困難となる事態が生じたときの備えとして、学生数に応じた対応、施設実習の日数、オンライン・学内演習の教材などさらに学習効果を高める工夫が必要である。

#### 謝辞

本研究の実施あたり、研究に協力していただいた看護学科学生の皆様、緊急事態宣言下にもかかわら

ず、本学の在宅看護学実習を受け入れ、多くの学びを与えてくださった訪問看護ステーション管理者およびスタッフの皆様は心より感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について事務連絡（令和2年6月1日）. 2020. [2021.5.27]  
[https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf)
- 2) 工夫が光る！在宅看護演習・実習，看護教育，医学書院. 2020；61（11）.
- 3) 学生の実践力を養う臨地実習の代替案，看護展望. 2020；45（13）.
- 4) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について（令和3年6月8日）. 2021. [2021.8.25]  
[https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt\\_igaku-000015851\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf)
- 5) 深山華織，岡本双美子，中村裕美子，松下由美子. 在宅看護学実習における学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果. 大阪府立大学看護学雑誌. 2018；24（1）：49-56.
- 6) 舟島なおみ. 看護学教育における授業展開 - 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて，医学書院，2020.
- 7) 大沼由香，星純子，鹿野卓子. 新型コロナウイルスパンデミック期における在宅看護実習による学生の学び. 伝統医療看護連携研究. 2021；2（2）：65-73.
- 8) 全国訪問看護事業協会 きらきらナース研究会. 地域で育てる新卒訪問看護師のための包括的人財育成ガイド. 2015. [2021.8.25]  
<https://www.zenhokan.or.jp/wp-content/uploads/guide10.pdf>

